

平成27年度スーパー食育スクール事業 事業結果報告書

受託者名	国立大学法人 お茶の水女子大学	実施校名	お茶の水女子大学附属小学校
学校のホームページアドレス	http://www.fs.ocha.ac.jp/		

1 取組テーマ（中心となるテーマ：食と健康）

食に対して能動的な児童を育てる効果的な SHOKUIKU プログラムの構築

2 栄養教諭の配置状況

栄養教諭配置人数	1人
配置されていない場合の対応状況	

3 推進委員会の構成

委員長	真島 秀行	お茶の水女子大学副学長
委員	榊原 洋一	お茶の水女子大学副学長
委員	赤松 利恵	お茶の水女子大学教授
委員	小玉 亮子	お茶の水女子大学教授
委員	菅原ますみ	お茶の水女子大学教授
委員	山崎 淳	文京区立窪町小学校校長
委員	森田 和良	筑波大学附属小学校副校長
委員	中島 仁美	お茶の水女子大学附属小学校PTA副会長
委員	池田 全之	お茶の水女子大学教授・附属小学校長
委員	神戸 佳子	お茶の水女子大学附属小学校副校長
委員	片山 守道	お茶の水女子大学附属小学校教諭
委員	岡田 博元	お茶の水女子大学附属小学校教諭
委員	足立 愛美	お茶の水女子大学附属小学校栄養教諭

4 連携機関及び連携内容

連携機関名	連携内容
お茶の水女子大学	評価方法、アンケート作成・集計、食育指導法
文京区立窪町小学校	比較研究(アンケート調査)
埼玉県鶴ヶ島市	体験学習等
公益財団法人キープ協会	体験学習
NPO 法人浅間山麓国際自然学校	体験学習
八ヶ岳農業実践大学校	体験学習
「味覚の一週間事務局」・東京ガス株式会社	出前授業

5 実践内容

事業目標

苦勞せずに好きなものを好きなだけ食べることができる飽食の時代、子どもたちの生活からは、手軽に食べられるものが多かったり、家族揃って食卓を囲む事が少なかったりという現代的な課題が見られる。同時に、就業形態の多様化による賃金格差から、一般家庭であっても食生活を含む生活習慣が整わないことも現代的な課題と言えよう。

本校の子どもたちを見ると、飽食である故の課題を感じる人が多い。好きなものを選んで食べることはできるが、与えられたものがどこで生産され、どのように運ばれ、どのように調理されているか、また廃棄物はどうなるのかへの認識は低い。このような姿を食に対して受け身な状態と捉えた。

これからの社会では、一人ひとりが自分の体を大切に感じ、食や健康に対して主体的に関わり、望ましい食習慣、生活習慣を形成することが求められる。このような姿を「食に対して能動的な姿」と捉え、そのような児童を育てることを目指している。

本校はこれまで、「『公共性』を育むシティズンシップ教育」等をテーマに研究を行ってきた。「食に対して能動的な姿」は、自分自身を価値あるものとして捉え、社会に積極的に関わろうとするシティズンシップの考え方や共通する部分も多い。給食においても、与えられたものを画一的に食べるのではなく、食材やメニューの意味や価値を考えたり、一人ひとりが感じる味の違いを認め合ったりしながら食に目を向けることは、食におけるシティズンシップだと考えている。

このように、食を中心としながら人間としての生き方や自尊感情、生きる力にもつながる本校の考え方を「SHOKUIKU」と表した。

本校の SHOKUIKU 実践は、教育課程全体を通した様々な方面からのアプローチと、多くの体験的な活動の特徴にしている。昨年度作成した「食に関わる指導の年間記録」から、創造活動・給食指導の二つの柱に各教科の学習を組み合わせた形で展開されていることが明らかになった。研究1年次では、これらの様々な活動を関係づけながら、「SHOKUIKUプログラム」という形で整理した。2年次となる今年度は、本校の食に関わる活動を「食に対しての意識を高める活動」「体験を通して食について考える活動」「食に関する知識を広げる活動」の三つの視点で展開する。

上記のような SHOKUIKU への考え方をもとに、以下の四つを目標として研究を進める。

- 画一的に与えられた量を食べるのではなく、味や栄養について、また、自分が食べられる量を考えて食べる
- 食べたことがないものや食べ慣れていないもの、嫌いなものでも、少しずつ食べようという意識をもつ
- 人によって味の好みや文化の違いがあることを尊重する
- 食に対して興味をもち、日常から情報を取り込む意識をもつ。何より、食を楽しむ気持ちをもつ

評価指標

- ①児童の食行動の変化
 - 生産・消費にかかわる理解
 - 食品選択の多様性にかかわる思考・判断
 - 給食及び食に関わる活動への関心・態度
- ②喫食量、身長・体重・運動量等健康指標
- ③各家庭の給食・食への意識調査

評価方法

① 児童の食行動の変化

ア 生産者の工夫、消費者の買い物の仕方の工夫にかかわる理解（3・5年生）

○方法：パフォーマンス評価

イ 食品選択の多様性にかかわる思考・判断（2・4年生）

○方法：質問紙調査、パフォーマンス評価

ウ 給食及び食に関わる活動への関心・態度（1・2・4年生）

○方法：質問紙調査

② 喫食量、身長・体重・運動量等健康指標との相関性の調査分析・整理

（昨年度3・5年生データの整理と考察）

○方法：身長・体重・喫食量・新体力テスト等のデータと「食に対して能動的な児童」の指標との相関

③ 家庭の食への意識について

○方法：質問紙調査（1・2・4年生）

昨年度調査した、各家庭の給食・食への意識調査の結果と今年度の調査結果を比較し、「食に対して能動的な児童」の尺度との関連を分析・考察する。

④ お茶の水女子大学附属小学校と近隣小学校児童の意識調査の結果を比較・分析する

○方法：質問紙調査（1・2・4年生）

昨年度調査した、各家庭の給食・食への意識調査の結果と今年度の調査結果を比較し、「食に対して能動的な児童」の尺度との関連を分析・考察する。

評価指標を向上させるための仮説(道筋)

【仮説1】

栽培や調理を体験したり、生産・調理の専門家とともに学んだりすることをもとにし、給食指導等で適切に評価することにより、食に対して能動的な児童が育つのではないか。

【仮説2】

食に関わる体験は、中期的な期間を経て、食に対する思考・判断や行動という形で表れるのではないか。

【仮説3】

保護者と協働した活動やともに考える機会を通して、子どもの食への意識・食行動に変容が見られるのではないか。

さらに研究2年次となる今年度は、1年次の研究成果をもとに、以下の方向で実践研究を進めていくこととした。

- ・食に対して主体的に関わる活動を設定し、食に対しての関心を高める
- ・食に関わる「人」を通して、食について考える機会を設ける
- ・保護者と協働して食に関わり、家庭でも食に対して能動的になれる場面を設ける
- ・縦断的な調査分析を通して、SHOKUIKUプログラムによる児童の変化を明らかにする

実践内容

○具体的な取組

① SSS評価のための取組

- ・アンケート調査について、家庭での食行動に関わる項目の追加内容検討
- ・平成26年度調査に行った横断的研究の概要まとめ
- ・保護者へのアンケート調査（1学期1回 2学期1回 実施 1・2・4年生）
- ・児童へのアンケート調査（2学期1回 1・2・4年生）
- ・近隣校へのアンケート調査（2・4年1回）
- ・昨年度実施したアンケートとのクロス集計・比較分析

② 実践した SHOKUIKU プログラムの整理・省察

ア 食に対する意識を高める活動

- ・保護者と協働した初期の給食指導（1年20日間実施 4・5月）
- ・そら豆の皮むき体験・実食（1年1時間実施 5月）
- ・とうもろこしの皮むき体験1時間（2年1時間実施 7月）
- ・栄養教諭や調理師の仕事を題材にした説明文【国語】（2年11～12月 12時間）
- ・調理員の教室訪問（全学級1回実施 6・7月）
- ・パクパク通信とパクパク通信ポストによる児童との交流（毎日の取り組み）
- ・たてわり給食（全学年1週間実施・2学期 10月）
- ・教材園を活用しての生産活動（2年16時間・2学期）
- ・味覚の授業（4年1時間・10月）
- ・食べ物の好き嫌いを何で感じるのか【てつがく】（4年3時間 11月）
- ・身近な米を見直そう【社会】（5年 10～11月）
- ・給食の献立作成とパクパク通信作成（委員会 6～2月）
- ・給食調理場面のビデオ視聴（1回実施・9月）
- ・給食委員会からの活動報告（2回実施・3月）

イ 体験を通して食について考える活動

- ・郊外園での栽培活動（全学年1回実施）
- ・ブルーベリーの摘み取り体験（1年4時間実施 7月）
- ・秋まつりに向けた関連活動【大学構内果実探し・野菜を食す体験等】
（1年20/30時間 9～11月）
- ・育てた苺の収穫と蓬団子パーティー（2年8時間実施 5月）
- ・教材園での栽培・観察・収穫（1年8時間・2年8時間実施 5月～7月）
- ・教材園を活用しての生産活動と調べ活動等（2年8/15時間・2学期）
- ・お月見に関わる体験・調理・発表等（2年18/20時間・2学期）
- ・火起こし・ホイル焼き体験（3年4時間実施 7月）
- ・学校宿泊体験でのカレー作り（3年14時間・2学期）
- ・スーパーマーケット見学・調べ・まとめ【社会】（3年6/10時間・2学期）
- ・プランターでの野菜栽培と有志による教材園での夏野菜栽培（4年 5～7月）
- ・自然と食に関わる選択学習【川での食体験・酪農体験】（4年1日実施 8月）
- ・農家での1日農業体験と、仕事についてのインタビューする（4年1日実施 10月）
- ・筍掘り体験（5年4時間実施 4月）
- ・林間学校に向けての食材選択【家庭】（5年4時間実施 7月）
- ・林間学校へ向けての体験学習【鮎の塩焼き・飯盒炊爨】（5年1日実施 7月）
- ・群馬県嬭恋村での夏野菜収穫体験とカレー作り（5年1日実施 8月）
- ・農業実践大学校での体験学習【酪農】（6年1日実施）
- ・日本の地域について課題選択し、調べたものを調理する活動【ご当地グルメ】

(6年6時間実施)

- ・調理実習【家庭】(5年8時間・1~2月・6年4時間・10月)

ウ 食に関する知識を広げる活動

- ・夏野菜を通しての栄養教諭・調理師との交流(2年2時間実施)
- ・秋まつりに向けた関連活動【大学構内果実探し・野菜を食す体験等】(1年10/30時間)
- ・秋のおいしい歌づくり【創作・発表活動】(1年8時間・2学期)
- ・秋蒔き野菜について調べ、栽培するものを選択する活動(2年2時間実施)
- ・教材園での栽培・観察・収穫(2年8時間実施)
- ・お月見に関わる体験・調理・発表活動等(2年18/20時間・2学期)
- ・栄養教諭や調理師の仕事を題材にした説明文【国語】(2年11~12月 12時間)
- ・スーパーマーケットでの野菜の売買について【社会】(3年4/10時間・2学期)
- ・群馬県嬭恋村でキャベツ生産が盛んな理由の学習【社会】(5年4/6時間実施)
- ・食材を選択するために必要な情報について調べる活動(5年2時間・6年2時間実施)
- ・給食の献立作成(委員会3時間実施)
- ・山形県庄内地方で稲作が盛んな理由【社会】(5年10時間実施・2学期)
- ・五大栄養素を学び、自分たちの食生活を見直す【家庭】(5年4時間・9月)
- ・統計から食生活について考える活動【算数】(6年3時間・1月)
- ・給食の献立作成とパクパク通信作成(委員会3/4時間・2学期)

③ 保護者と協働した食育へ向けての取り組み

- ・スクールランチタイム(給食だより)による給食指導についての報告(毎月)
- ・給食試食会(1回実施 10月)
- ・食に関わる活動への参加(活動毎)
- ・活動に参画した保護者の声を他の保護者に広げる取り組み(活動毎)
- ・学年発表の参観(学年毎各1回)
- ・講演会 和食料理人 榎木春幸氏(1回実施 10月)
- ・アレルギー児童保護者会(1回実施 12月)
- ・SSSパンフレット作成(1月)
- ・PTA通信でのSHOKUIKU実践の紹介(2月)

6 成果

① 1年次調査の分析と考察

SHOKUIKU プログラムと子どもの健康との関連を考察するため、大学と連携して子どもの姿を捉えるアンケートを作成・実施した（アンケート内容の詳細は1年次アンケートを参照）。

「食に対して能動的な子ども」を、①食への興味関心②食への肯定感③食のマナーと行動④食の判断と実践という四つの観点から捉え、子どもの健康状態（疲労感・無気力など）や生活習慣（好き嫌い、排便習慣など）との関連を分析したところ、以下のことが見えてきた。

○食への興味関心・食への肯定感の高い子は、好き嫌いが少ない。

興味関心が高い子とは、材料の名前がわかり、どこの国や地域の料理かを考えている子である。

食への肯定感が高い子とは、給食を楽しみにし、家でも給食のことについて話している子である。

○食の判断と実践ができる子は好き嫌いも少なく、少食ではない。また、疲労感を感じにくい。排便習慣が規則正しい子どもは、そうでない子に比べ、食の判断と実践を行っていた。

食への判断と実践ができる子とは、食べると決めた量をしっかり食べたり、苦手なものでも少しは食べたりする子である。これらの事柄は、生活習慣との関わりがある。

○他校との比較から、本校の子どもたちは食に対して能動的であるが疲労感が高い。

親子で食事を作ったり、学校での体験を話したりすることが子どもの意欲を喚起し、経験を複層的にしていくのではないか。ただし、登下校時間が長時間に渡ることなどの生活時間帯の違いから、疲労感が高いのではないか。

○新体力テストの数値高群の女兒に、食への判断と実践を行っている子が多い傾向が見られる
食への判断と実践が高い子は、生活習慣が規則正しいだけでなく、よく体を動かしていると言えるのではないか。

② 2年次アンケートからの考察

2年次には児童・保護者及び近隣校へのアンケート調査を行い、昨年度との比較から子どもたちの意識にどのような変容があったのかを、昨年度子どもたちが意欲的に活動していた現4年生を中心に考察した。

○食に対して能動的な子ども尺度の合計得点では有意差が見られなかったが、下位尺度「食の判断と実践」は、有意に得点が高くなっていた。逆に、下位尺度「食への肯定感」は得点が低くなった。

それぞれの尺度ごとに、変化の特徴があるのではないか。

○食べ残し・食欲・排便習慣などの生活習慣を昨年度と比較すると、有意とは言えないまでも、各項目の素点が増加していた。

昨年度11月調査では、生活習慣の向上が見られなかったことから、SHOKUIKUプログラムによる経験が時間を経て内可し、生活習慣の向上につながったのではないか。

○疲労感20項目の合計得点は、昨年度と比べて有意に低くなっていた。

全ての項目で疲労感の得点が低下していた。中でも「無気力」は優位に低くなっている。

③ SHOKUIKU 実践に関わる成果

ア 食に対して主体的に関わる活動を設定し、食に対しての関心を高める

この視点は、本校の実践の中心である。昨年度実践では、年間を通して食と繰り返し関わることで、食を楽しみ、食への関心・食への肯定感を高める効果があったことが、データからも確認されている。

この考察を受け、今年度は体験のつながりを重視した実践が展開された。今年度も、5年生が行った「自立」をテーマにした林間学校に向けた取り組みでは、食材を選択する活動や鮎の

串打ち、野菜の朝採りなどの活動が関連して設定された。さらに、この経験をもとに日本の伝統である餅つきを自分たちで行い、留学生との交流で振る舞うなど、経験のつながりを意識した活動が行われた。

2年生が行ったお月見会の実践では、「団子作り」という体験のつながりだけでなく、団子の並べ方を模型で確かめたり、月に関わる劇発表や習字体験、灯籠を作って夜の屋上を飾ったりと、教科・領域横断的な活動が展開された。

このように、教師が食というテーマのもとで子どもの経験をつなげ・広げていく意識をもてたことは、SHOKUIKUプログラムの成果と捉えている。

イ 食に関わる「人」を通して、食について考える機会を設ける

この視点は、昨年度実践からの発展として位置付けた。体験活動を通じた専門家との関わりはもちろん、それ以外でもこの視点を生かした実践が行えないか、学習材開発を試みた。

人を介して食料生産や食品選択について考える社会の学習や、国語の説明文で栄養教諭や調理員の仕事を題材とした自作教材と言語活動の開発、「作り手の顔の見える給食」を目指した給食室の実践などの実践を行った。

人を介することで、「食べる」という直接的な体験だけでは見ることができない、食材に関わる世界がより具体的に見えるようになり、「食への意欲を高める活動」として位置づけることができた。

ウ 保護者と協働し、家庭でも食に対して能動的になれる場面を設ける

講演会の実施や、保護者向けのパンフレット作成だけでなく、教育活動への保護者の参加について考えた。

これまでも行事への保護者参加は行ってきたが、その参加を発達段階に合わせて整理した。

1年生では初めての給食にお手伝いとして参加したり、秋祭りでの秋の食材を使ったお店を開いたりと年間を通して参加する機会を増やしている。

2・3年生では少し難しい活動に保護者と一緒に取り組む活動サポーターとして参加から、子どもの活動を見守る環境としての参加へと形態が変化していく。

4・5年生では、校外学習に出かけたり専門家を招いたり、学校外の大人との関わりから食を広げる姿がある。その経験を保護者に知らせ、学校と家庭での生活がつながるよう試みた。

6年生では、保護者も食に関わる一人として、ともに課題追求に向かう姿を目指している。

このように、大人が伝える・経験させるだけでなく、「食に対して能動的な子どもを育てる」ための関わりとして、子どもたちの生活や経験を共有していくことが保護者との協働に必要な側面と考える。

エ 縦断的調査を通して SHOKUIKU プログラムによる子どもたちの変化を明らかにする

今年度調査では、下位尺度「食への興味関心」は数値としては微減しているが、一般的には高い数値であったことから、体験によって高まった関心が、1年間という期間を経過しても継続されていると考えることができる。このことは、体験を通して食を楽しむことを中心に取り組んできた本校実践の一つの意味づけと言える。

さらに、①下位尺度「食への判断と実践」が優位に伸びていること ②生活習慣の各項目で得点が上がっている傾向が見られること、②疲労感尺度各項目で得点が下がっていることなどを総合して考察すると、昨年度の体験によって向上した「食への興味関心」が、時間をかけて子どもたちの中に内化し、「食への判断と実践」の向上という形で表れた。「食への判断と実践」が向上することによって、生活習慣や疲労感の改善につながったと考えることができる。

7 スーパー食育スクール事業の取組状況の情報発信

① 校内に向けて

- ・給食だよりにて、保護者に向けた情報発信
日々の給食のようすや子どもたちの姿を毎月紙面にして報告した。保護者への連携を図り、好き嫌いに関する話などのトピックを掲載した。
- ・学年だよりにて、保護者に向けた情報発信を紙面にて報告した。各学年の食に関わる行事等の報告を中心に行った。
- ・授業や体験活動への保護者の参加と協力、学習発表への保護者参観を行った。
- ・食育パンフレットを作成し、事業への理解、取組を促した。
- ・栄養教諭によるレシピの提供を行い、家庭でも給食のメニューを味わえるよう工夫した。

② 校外に向けて

- ・本校ホームページにて取組状況等の情報発信を行った。定期的に更新を行った。
(<http://www.fs.ocha.ac.jp/sss2.html>)
- ・「初等教育資料」（文部科学省）にて、本校の実践報告を行った。
- ・食育パンフレットを作成し、校外に向けた活動報告を行った。
- ・平成 27 年度 SSS 事業事例発表会にて事例発表を行った。
- ・課題別部会にて実践報告と協議会、講評をいただいた。
コメンテーター (株)グッドテーブルズ 代表取締役 山本 謙治 氏
共同研究者 お茶の水女子大学 教授 赤松 利恵 氏
- ・他校からの参観を受け入れ、授業公開や研究 1 年次の成果報告を行った。
奈良女子大附属小学校 秋田市立上新城小学校
新居浜市立泉川小学校 武雄市立若木小学校

8 今後の課題

- ① ここまでの考察と、2年間に行われた実践事例の特徴から、食育プログラムを整理する可能性の一つとして、以下のような方向が見えてくる。

低学年：食に関わる多様な体験によって、食に対する意識を高める

中学年：主体的・継続的に食に関わっていく活動を設定することによって、体験を通して考える経験を繰り返す

高学年：プロジェクト型の学習の中で、食に関わる経験を保障し、目的に向かって調査・実践を重ねるような活動を行うことで、食に関する知識を広げる

全学年：継続的で適時性のある給食指導と、多様な人が関わる献立の提供によって、食に関わる世界を広げる

このように、SHOKUIKU プログラムを「食に対して意識を高める」「体験を通して考える」「食に関する知識を広げる」というその特徴と目的によって横軸で整理だけでなく、発達段階という縦の軸を用いて整理することで、カリキュラムとしての具体性を増すことができると考えている。この整理に基づいた実践が次年度の課題となる。

「食に対して能動的な子ども尺度」をつかった継続調査を行い、下位尺度の変化についての考察を進めることも、次年度にとり組みたい課題である。

2年間の調査から、下位尺度ごとに高まりやすい発達段階とそうでない発達段階があるのではないかということが見えてきた。さらに、下位尺度「食への判断と実践」が生活習慣や集中

力との関わりが見られること、「食への判断と実践」は、実践後にすぐに上昇するのではなく、カリキュラムとしてくり返し「食」と関わることで、時間を経て涵養されるのではないかということなどが次第に明らかになってきている。3年間の変容を見ていくことで、子どもたちの変化をどのように捉えていけばいいのかを明らかにしたい。

② 今年度、「人」に焦点を当てた教材や活動の開発を行ったように、次年度は給食を活用した、「食について子どもが考える活動」の開発を行っていきたい。子どもたちの興味・関心を基盤に展開される体験的活動と、発達段階に合わせた「食について考える活動」の組み合わせを有機的に行えるよう、日々、学習材として接している「給食」を活用した具体的な題材の開発を行う。

③ 今年度から、「保護者との協働」を柱に挙げた。各地で行われている「啓発」という意味だけでなく、食育への知識や関心が高い本校の保護者層を活かした活動を志向したものである。今年度は、各実践への関わり方をひとまず整理した段階である。

本校では、低学年の教育課程研究で、食育に限らず「保護者参加」を進めてきた。その成果として、繰り返し参加することで学校の教育方針への理解が深まり、子どもの活動や学びを保護者も意味づけながら情報を共有できることが挙げられる。

SHOKUIKU プログラムとしてこのような参加を実践・継続することができれば、自ずと子どもたちの食への意識が高まると考えられる。実践の具体化を進めたい。